

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生5・6年の部 最優秀賞

母への思い

鳥越小学校五年

山本 やまもと

悠温 ひさはる

ぼくの母は、見ていてとてもおもしろい。表情が豊かで、気持ちを全体で表現するからだ。クイズ番組を見ていて自分の答えが合うと、目をまーるくしてまゆ毛をびくびくしながら自慢気な顔をするし、はずれば顔を天井に向けたかと思うと床にうつぶせになり、手足をバタバタさせて残念がる。高校野球を見ていた時は、興ふんして選手と同じ格好で打ったり守ったりと自分がやっているかのように動いていた。ぼくは、野球を見るより、こっちの方がおもしろくて笑いながら見ていた。

「なんで、そんなに動くん？」

と聞くと、反対に

「なんで、そんなにじつとしてられるん？みんな一生けん命やってくれんやから、早く立って応えんして。」

と言われた。勝ったチームを見れば、

「がんばったからやね。今までどれだけ大変な思いをして練習してきたんやろ。」

と大泣きし、負けたチームを見れば、

「よくがんばったね。大変な思いをしてやってきたんに、どんなにくやしいやろ。」

と、また大泣きする。ときどき、そんな母やぼくを見て姉は、

「うるさい！静かにして！二人は、本当に似とるわ。」

と、冷めた顔で言ってくる。ぼくはいつも、母のペースに乗せられ、大声を出し走り回っているようだったけど、似ていると言われイヤだなと思っただけではないし、なんかうれいというかてれくさい感じがする。

前に、なんで母はこんなふうなのか姉に聞いたことがある。姉は、

「ママのお母さんは、早くに亡くなったからなれない旅館の仕事をがんばったし、一生けん命家族を守ろうと必死にやってきたんやと思うよ。

たくさんの人に助けてもらって感しゃし、人がいることや自然、いろいろなこと当たり前ではなくて、ありがたいことなんやって知ってるからじゃないか。だから、うれしいことは体いっぱい表現するし、自分

のつらかったことや悲しいことは話さんけど、がんばってる人を見ると応えんしたくなるし、自分と重なって泣いてしまふんやろな。」と言っていた。ぼくには、まだ理解できないと思ったけど、母がお母さんを亡くしてからのことや悲しかったこと、苦労したことは聞いたことはなかったし、いつも笑ったり怒ったり泣いたりしている母が、当たり前そばにいてくれるから、母がどんな思いをしてきたのか、どんな気持ちでいるのかなんて考えてもみなかった。

母は、ぼくに対しても気持ちを表現してくる。テストでいい点をとってきたときや、ゲームで勝ったときは、両手を大きく広げ目と口を顔いっぱいにして、

「すごいじー。さすがやなー。」

と飛びついてくる。反対に、失敗したときやつかれていたときは、

「大丈夫や。」とやさしく静かに頭をなでてはげましてくれる。ぼくは母にふれられることもイヤじゃない。温かいし気持ちが落ち着くから。でも、一番好きだったのがおんぶをしてもらうことだった。五年生になってからはやらなくなったけど、毎朝二階のしん室からリビングまでおんぶで運んでもらっていた。朝目が覚めて

『起きるのいやだな』『学校行くのいやだな』と思っただけでも、母を大声でよびおんぶして顔を背中にくっつけていると、気持ちよくて母の中にすい込まれていき、体と心が温かく軽くなった。そうしていると、『今日は、学校で何して遊ぼうかな』『早くご飯食べて準備しよ』と前向きにもなれたから不思議だ。

「えー、まだするん。」

「重くなったね、いつまでできるんかな。」

「大きくなったら、ママもしてや。」

と母は言いながら忙しく朝食の準備をしているときでも必ず迎えにきてくれた。

母の背中には、パワーがある。きっと、今までたくさん努力をして、

自分のことより周りの人のことを考え感しやを忘れずにがんばってきたからなのだと思う。悲しかったことつらかったことを見せないで、笑顔でおもしろい顔や体いっぱい気持ちを表示している母の背中だからこそ、やさしさと強さを与えてくれるのだと思った。おんぶしなくなったら、今も、そばにいて、パワーを与えてくれる母はすごい。似た者同士だから、ぼくも同じような背中になれるだろうか。きつと当たり前にあることを大切に、感しやすくなる心忘れずにいたらなるかもしれない。そして、いつか母をおんぶしたときに、気持ちをちゃんとわかってあげられ、やさしさと強さを与えてあげられるよう、たくさんのことにちよう戦し努力していこうと思った。

